
バカとアルビノと携帯捜査官 7

巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとアルビノと携帯捜査官7

【Nコード】

N1505Y

【作者名】

巧

【あらすじ】

リメイク前の僕とFクラスと婚約者に携帯捜査官7を足しました、明久はAクラスに居ますではグレートアップ？した、バカとアルビノと携帯捜査官7をお楽しみに。

キャラ設定（前書き）

朝に見た人はおはようございます

昼に見た人はこんにちわ

夜に見た人はこんばんわ

はじめての方もいると思いますので始めまして巧です、バカとアル
ビノと携帯捜査官7、見たとき思いましたタイトル長！（笑）まさ
かまさかのセブンやゼロワンがエクスカリバーを持ったりします（
笑）徐々にですが更新していくので楽しみに待っていただけたら幸
いです。

キャラ設定

女オリキャラ

名前なづな東方院鈴音すずね

身長155・8

体重（セブン（グライダー装備）の振動粉碎を食らったため作者の血で見えない）

スリーサイズ（ゼロワン（デモリッション装備）のチェーンソーで切られたため作者の血で見えないだがFよりのEカップである事が判明）

性格は明るいがアルビノであつた為いじめを受け人見知り、家は霧島家と同等の大金持ち、でも花嫁修行をしているため家事は出来る。

原作との違い。

明久がAクラス

召喚獣も使えるがフォンブレイバーを使う方が多い

結構甘くなるかも？

CALL1 僕の相棒は黒い携帯

僕事、吉井明久は、通学路を一人で歩いてた。

「ふあゝあ、振り分け試験は本気の点数出したからAクラスかな？」

「

『何を言っている、バディ、それでもAクラス代表にならないくらいに点数を調節しただろう？』

僕はポケットから黒い携帯を出して開く。

「ゼロワン、僕はクラス代表なんかになりたくないからしたんだよ？」

「

『ふつ、バディならクラス代表なんかそつなくこなせるはずだが？』

『

「はいはい、鈴音の退院日で今日だっけ？」

『ああ、セブンから連絡は受けている』

「そつか、鈴音と一緒にこの道を歩けるんだね」

『バディは鈴音にべた惚れだな』

「なっ、ゼロワン！／／／」

『顔が真っ赤だぞ？ バディ』

「まさか、自分の携帯にいじられる日が来るとは」

ゼロワンと話しながら通学路を歩いていたら校門が見え見覚えのある人物が立っていた。

「遅いぞ、吉井！」

「げ、鉄、西村先生」

「今、鉄人と言おうとしなかったか？」

「言ってますん」

「そうか、まあいい、受け取れ」

「あ、どーも」

僕は鉄人から封筒を受け取り、剥がしにかかる。

「実は先生は去年のお前を見て、こいつはバカのふりをしてる天才なんじゃないか？ と疑いをかけていたんだ」

「はははは、さあ、それはどうでしょう？」

『バディ、その封筒は上の部分を破くんだぞ？』

「わ、分かってるよ」

「先生は自分の間違いに気付いたよ」

封筒の上の部分を破り中を紙を取り出し開く。

「お前は！、バカの振りをしていた天才だ！」

紙にはAという、文字が書かれていた。

「よし！ クラス代表になるのは回避できた」

「お前、やっぱり頭良かったのか」

「まあ、じゃっ、行つてきます」

「ああ、行つて来い」

僕は教室に歩き出したっていうか、鉄人っていい先生だよね。

「此処か」

僕はAクラスの教室のドアを開けた。

「吉井君、遅刻ですよ」

「すみません、高橋先生」

「次が霧島さんの番ですか今の内に挨拶をしてください」

「あ、はい、吉井明久です、一年間よろしく願います」

教室がざわめいてるのが分かる、まあ、当然なんだけどね。

『おい、今騒いでいる奴ら、バディの事をバカにしてるのか？』

「ちよっ！　ゼロワン、学校では静かにしてるって約束でしょ！？」

「

『知るか、今はバディをバカにした奴をデモリッションの錆びに
てやる』

僕のポケットからゼロワンが変形して出てきた。

「ちよっ！　こら、ゼロワン」

『バディに俺の事が捕まえられるかな？』

ゼロワンを掴もうとするたびにジャンプして僕の手を避ける。

「捕まえた！」

『離せ、バディ！　今すぐバディをバカにした奴をデモリッション
の錆びにしてやる！』

「ゼロワン、落ち着いて」

『相棒をバカにされて落ち着けるか、くっ、抜けん』

「……吉井、その携帯、何？」

「霧島さん、これは、ちよっ、暴れないでよ！　ゼロワン」

『離せ！』

「しょうがない、こういう時は」

僕はゼロワンのボタンをプッシュした。

『あつ、くそ』

「やっと、おとなしくなってくれたよ」

「……吉井、それは？」

「これは、フォンブレイバー、僕と僕の幼馴染の東方院鈴音って言う子と一緒に作ったんだよ、名前は一番最初に完成したからゼロワン」

「……なるほど、とりあえず席に座って」

「あ、うん、わかった」

僕はゼロワンをポケットにしまい開いている席に着いた。

「……霧島翔子」

それだけ！？

「これが起こる、試召戦争でどのクラスにも負けないでください」

試召戦争か、僕としては興味があるんだけどAクラスだしやる確率は少ないか。

「確か吉井君だったよね」

「ん？ 確か、え〜っと？」

『バディ、この娘の名は工藤愛子、一年生の終わりに転入してきた』

「ありがとう、ゼロワン、工藤さん何か用かな？」

「観察処分者の吉井君があんでAクラスに居るのかな〜っと思つて」

「それあたしも気になるわ」

「……私も」

「実は一年生の頃はあまり目立たない点数取つてたんだ、二年生になつたらAクラスと一緒に入ろうねって幼馴染の鈴音と約束してAクラスに入ったんだよ」

「へえ〜、そうなんだ」

「でも確か幼馴染の子、名前、東方院鈴音なのよねそんな子Aクラスに居たかしら？」

「……そんな子いなかった」

「実は一年生の中頃、5歳くらいの女の子が道路に飛び出してその子が引かれそうになって、鈴音がその子を助けたんだけどその代わり鈴音が代わりにひかれちゃってね、今、両足の複雑骨折で入院してるんだ」

「そうなんだ」

「聞いちゃ悪かったかしら？」

「ううん、そんなことないよ」

「……吉井、東方院ってあの東方院？」

「ああ、うん、鈴音は東方院グループの一人娘なんだよ、実家は超お金持ちでフォンブレイバーも東方院グループで開発したし、ねえゼロワン」

『覚えていない、それよりバディ、いいのか？』

「へ？　いって何が？」

『鈴音に怒られても知らないぞ？』

「あ！　そうか、今日、鈴音の退院日だっけ、工藤さん、木下さん、霧島さん、僕、病院に行かないといけないから」

「行つてらっしゃーい」

「また明日ね」

「……また」

僕は机に置いた荷物を手取り教室から出た。

（NOside）

明久が教室を出た後ある三人の話は続いていた。

「吉井君の幼馴染気になるな」

「気になるけど今追いかけても追いつかないし」

「……吉井に盗聴器とワイヤレスのカメラなら取り付けた」

「なにやってるのよ、代表」

優子は頭を抱えていた。

「まあ、いいじゃん、でも吉井君が行ったのって病院だよな大丈夫かな？」

「……たぶん、とりあえず電源ON」

パソコンの画面が座席の映像を映し出した。

「坊主、今日はえらく早いな」

「ええ、まあ」

「なんだ？ 今日退院日なんか？」

「司狼さん、感がいいですね、今日は鈴音の退院日だから荷物まとめるの手伝おうかと」

「坊主、鈴音ちゃんにべた惚れだねえ」

『べた惚れって』

『着いたぞ、料金は1375円だ』

『はい』

『まいどあり〜』

画面が大きい病院を映し出した。

『行きますか』

『バディ』

『ん？ 何、ゼロワン？』

『俺はスリープモードに入る、あまあまな空間見ていられないからな』

『ばれなかったみたいだね』

『たぶんだけど、ゼロワン、わざと言わなかったんじゃないかしら』

『……その可能性はある』

『鈴音、入るよ』

『え、うん、いいよ』

画面に映ったのは赤い瞳に白い髪的美少女だった。

「赤い瞳に白い髪ってまさか」

「アルビノね」

「……私、始めて見た」

『鈴音、足の方どう？』

『うん、さっきお医者さんに診てもらったんだけど今日退院していいって』

『そっか、じゃあ、明日から一緒に学校行けるね』

『あ、うん、そうだね』

『鈴音』

『なに？ きゃっ！』

「うわ、大胆」

「吉井君、草食系かと思ったら肉食だったのね」

「……もしかしたらこの子いじめられてたのかも」

「いじめ？」

「……うん」

『あの、アキ？　／＼／』

『大丈夫、大丈夫だから、小学校の時みたいにいじめられたりしないよ』

『でも、ん／＼／』

「うわー、音だけでなにしてるか分かるよ」

「甘いわね」

「……うらやましい」

『アキい、はあ、くちゅ、んんん！？　／＼／』

『ぶはあ、そんな暗い事言う子にはお仕置きが必要だよね？』

「ねえ、見るのやめない？」

「あたしもそう思うわ」

「……同感」

『だめだよお、まだ朝だし、それに此处病院だよ？　／＼／』

『大丈夫だよ、こんな事もあるつかと扉に鍵掛けといたし、だからたっぷり可愛がつてあげるね、鈴音』

「代表、早く電源オフにして、ここから先は僕達にはまだ早いよ」

「早く、吉井君が東方院さん前のボタン開け出したから」

「……これが電源オフのスイッチのはず」

パソコンの画面が暗くなった。

「とりあえず、勉強しよっか」

「そうね」

「……うん」

三人はさっき見た光景を忘れる為に勉強を始めた。

CALL 1 僕の相棒は黒い携帯（後書き）

明久あああああ！？ 暴走してやがる！？ ↑（暴走させた本人）えーつと、とりあえず、言い訳をさせてください、（作者が土下座中）あのですね、あまあまな空気を作りたかつたんです、はい、そしたらなぜかエロ方面に向かいました、作者の技量では修正できませんでした。

CALL2戦争（前書き）

遅れてすみません諸事情によりなかなか更新できませんでした。

CALL2戦争

「これからどうしようか、すずね」

「そうだなあ、アキが行きたい所ならどこでもいいけど」

ちよつと僕が強くしすぎたせいで三時間位鈴音は動けなかったが動けるようになったので退院手続きをして今は僕の部屋に居る。

「退院祝いなんだからこんな時ぐらい我儘いいなよ」

「じゃあ甘いもの食べたい」

「OK、じゃあラ・ペデイスに行こうか」

「うん」

「あ、そうだ、ゼロワンの電源入れないと」

『ん？ ああ、鈴音久しぶりだな』

「うん、久しぶりゼロワン」

『まったくお前がいなかったせいでバディは一時期何に対しても無気力だったんだぞ』

「ちよつ！ ゼロワン！？」

『事実だろ？』

「事実だけど恥ずかしいって言うか何って言うか」

「えへへ、アキって本当に私が居ないとだめだね／＼」

「うんだから」

僕は隣に座っている鈴音の抱き寄せる。

「生まれ変わっても一緒に居てね、鈴音」

「うん、約束だよ？／＼」

「約束するよ」

「嬉しい」

「じゃあ甘いもの食べに行こうか僕のお嫁さん」

「うん」

キングクリムゾン！

「なぜかものすごい電波を受信した気がする」

「アキ、大丈夫？」

鈴音に頭の心配をされた。

「大丈夫だよ……たぶん」

「今たぶんって言ったよね」

「そんなことよりセブンじゃべらないけどどうかしたの？」

「あれ？ そういえばしゃべらないな」

『ん？ なんだ、バディ』

「さつきから黙ってたけどどうかしたの？」

『あまあま空間がたえず生産されていたこの空間に水を差すのはいけないことだと思ったからだな』

「あまあま空間／／／」

「セブン、あんまり鈴音をからかわないで」

『すまない』

「ほら入るよ」

「え、あ、うん」

僕達はラ・ペディスに入った。

く雄二SIDEく

「俺達FクラスはAクラスに宣戦布告する」

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるのは嫌だ』

『姫路さんさえいれば何もいらぬ』

不満の聲が上がつてゐるが予想済みだ、最後は予想外だ。

「そんなことはないFクラスにはAクラスに勝てる要素がある」

俺は一度大きく息を吸う。

「おい、康太、畳に顔をつけて姫路のスカートの中を覗いてないでこっちに來い」

「は、はわっ！」

「……（ぶんぶん！）」

「土屋康太、こいつがあゝの『寡黙なる性職者（ムツツリー二）』だ」

「……（ぶんぶん！）」

『ムツツリー二だと！？』

『バカな奴がそうだと言つのか？』

『だが見る、あそこまで覗きの証拠を隠そうとしているぞ』

『ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ』

「次に姫路だ、實力は知つてゐるだらう？」

「え？ 私ですか？」

「ああ、うちの主戦力のうちの一人だ、期待してる」

『そつだ俺達には姫路さんが居るんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『ああ、彼女さえいれば何もいらぬい』

「木下秀吉だつている」

「わしかの？」

『おお……！』

『ああ、あいつ確か木下優子の……』

「島田美波もいる」

「うち？」

「ああ、こいつは数学だけはBクラスレベルだ」

『数学はBクラスレベルだと……！？』

「もちろん俺も全力を出す」

『確かになんだかんだやつてくれそうな奴だ』

『坂本つて確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか？』

『実質Aクラスレベル二人も居るのか！』

「雄二よ」

乗りに乗つてるときに秀吉が話しかけてきた、こいつにはばれるか。

「なんだ？」

「Aクラスに勝てるって言っておるが嘘ついておるの」

「お前には分かつちまうか、ああ、俺達Fクラスは絶対にAクラスには勝てない一つのイレギュラーが向こうに居るからな」

「イレギュラー？ 明久のことか？」

「ああ、明久は本当はBクラス上位並みの点数があるからな、なんでも自分の幼馴染と一緒にAクラスに入るっていう約束したらしいからあいつは確実にAクラスにいる、あいつの操作技術とAクラス並みの点数、ぞっとするな」

「明久の操作技術にAクラス並みの点数確かにぞっとするの」

「それがイレギュラーだ」

俺は一回息を大きく吸う。

「だが俺たちががんばれば明久が居ようと勝てるそして手に入れるのは？」

『システムデスクだ！！』

こうして俺達の戦争が始まった。

〈明久SIDE〉

僕はラ・ペディスから帰ってきて家でくつろいでる。

「そついえば鈴音振り分け試験の結果どうなったの？ 確か病院で受けたんでしょ？」

「ふふふふ、その場でAクラスって言われた」

「そつか、じゃあ一緒のクラスだね」

「アキも約束守ってくれたんだ」

「もちろんだよ」

『バディ』

「ん？ なにゼロワン」

『Fクラスが試召戦争を始めたようだ』

「Fクラスが？ 雄二か」

『だろうな』

「雄二？」

「僕の友達だよ」

「ふゝん」

「ゼロワン、雄二に電話して」

『了解した』

ゼロワンが変形して雄二の携帯に電話する。

『もしもし?』

「雄二? 僕だけど」

『悪いな、俺にバカの知り合いは居ない』

「誰がバカだこらあ!」

『お前だ、明久』

「僕だってわかってるなら最初からそう言え!」

『で何の用だ?』

「無視!? まあいいけど試召戦争始めたんだってね」

『情報が早いな』

く雄二SIDEく

「情報が早いな」

まさか知られるとは、俺たちの狙いにも気づいてるかもしれないと
りあえずスピーカにするか。

『まあね、狙いAクラスのシステムデスクってところかな?』

「気づいてたか」

『少し考えれば分かるよ』

「そう言えばお前はAクラスか?」

『そう僕はAクラス勉強したかいがあったもんだね』

「当面の障害はお前ってことか」

『だろう、ん!?』

「明久?」

『ん…ちゅ…はあ…今電話してるんだけどな』

なんだ? 誰と話してるんだ?

『アキイ……』

「この声は誰じゃ?」

「さあなでも島田以外に明久の事アキって呼ぶ奴居たか?」

『ごめん雄二電話切る』

「お、おい明久?」

『らめえ、首弱いのに、んあ』

『電話の邪魔をしたからお仕置きしてあげるよ』

その言葉をスピーカーから聞こえた瞬間電話が切れた。

「ゆ、雄二よ」

「何も言つな、秀吉」

「今の声はあれじゃよな？」

「明久が女子を今おいしくいただいてる所なんだろ」

「……（ブシャアアア！）」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺りに行くわよ（行きます）！」

「落ち着け、まず明久にとって女友達であるお前らが嫉妬することはおかしい、お前らはいいつと付き合ってるわけじゃないんだからあいつが女と18禁な事してようが関係ないだろ」

「「うつ！」」

「クリーンヒットじゃな」

「当然だろあいつにとっては女友達なんだぞ、島田の場合は天敵かもしれないが」

「……明久は島田の写真を買った事は一度もないというより女子の写真を一枚も買って無い」

「ふーん」

あの明久が女子の写真を一枚も買って無い何か裏がありそうだな。

「とりあえず須川Dクラスに宣戦布告して来い」

「断る、坂本が行けばいいじゃないか」

「はあ、そうかDクラスにはお前のファンが居ると聞いて気を使ってたんだがな」

「言ってくるぜ！」

俺に騙されてDクラスに走ってく須川最高だな。

「お主鬼畜じゃな」

「有効活用だ」

ふむDクラス戦のためにミーティングしておく必要があるな。

「屋上行くぞ、そこでミーティングする」

「了解じゃ」

俺は秀吉達を連れて屋上に向かった。

「そう言えば雄二よ、なぜDクラスなのじゃ？ Eクラスでもいいのではないか？」

「その意見はもつともだがこっちには姫路がいるそれに島田もな」

「？」

「分からないかまず島田やお前やムツリー二に引きつけてもらい代表の平賀ってヤローは姫路がとどめをさす」

「なるほどつまりワシ達は姫路が回復試験を受け終わるまでの時間を稼げばいいんじゃない」

「その通りだ」

「了解じゃ」

「……任せろ」

「ウチだってやる時はやるとこ見せるんだから」

「がんばります」

「いいか、俺たちは最強だ」

俺は戦争の引き金を引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505y/>

バカとアルビノと携帯捜査官 7

2011年11月26日20時52分発行